

第1回 東アジア子ども学交流プログラムの発足



■主催・チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、中国長沙師範専科学校
■共催・㈱ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所
■後援・中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、
日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議

East Asia Child Science
Exchange Program

子どもの育ちに大切なもの、「生きる喜びいっぱい」

Joie de Vivre

小林 登

Kobayashi Noboru (医学博士)
 チャイルド・リサーチ・ネット所長
 東京大学名誉教授
 国立小児病院名誉院長

① 生きる喜びいっぱい

② 子どもの「遊び力」が危ない

③ 子育て・子育てエンバワメント

④ 子どもの社会性の発達とその障害

●虐待により身長・体重の伸びが止まる

子どもの体の成長・心の発達にとって何が一番大切かということをお話したいと思います。

私は、子どもが、遊ぶ喜び、学ぶ喜び、そして生きる喜びいっぱいになる——フランス語ではこれを「Joie de Vivre」(ジョワ・ド・ヴィール)と言いますが、そのような状態になることが一番重要だと思います。

我が国では残念なことに、最近母親にかわいがられない子どもが増えていきます。いわゆるネグレクトされる子どもであり、従来エモーション・デプリベーション・シンドローム(母性剥奪症候群あるいは情緒剥奪症候群)と呼ばれていました。そのような子どもの発育に関するグラフをご紹介します。——図1

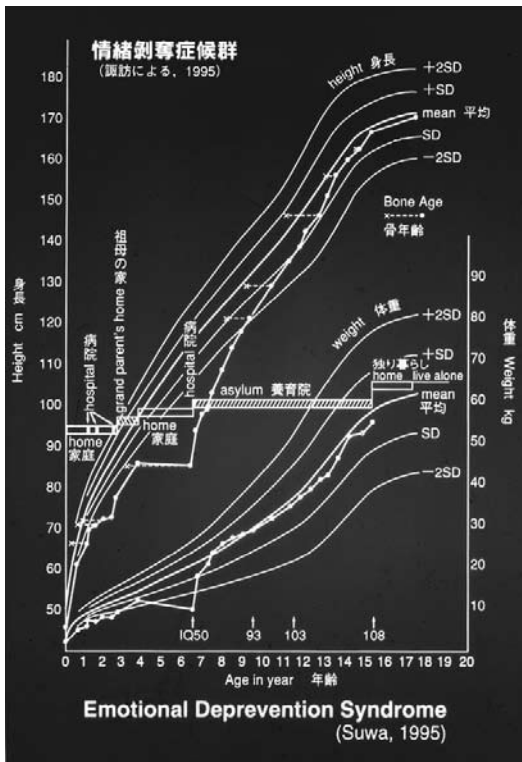


図1

これは、母親によって心理的に虐待されたひとりの子どもの身長曲線と体重曲線です。上が身長曲線、下が体重曲線で、向かって左の端が生まれたときです。下の横軸は年齢です。ちょうど四歳のころから身長曲線が平らになっています。そして体重曲線は少し下がっています。それは、病院から虐待を行なう母親のもとに帰った時期で、体重増加が止まったり、身長が増えたりしてしまっただけです。

この、身長が1センチも伸びない、体重は少し下がっている直前の時期は、身長の伸び、体重の増加もよいことが明らかに見られます。これは、おばあちゃんに世話されているときです。子どもが学齢になり、親から離されて施設に入りますと、身長曲線も体重曲線もどんどん増加して、何本かのなだらかな身長や体重曲線の正常範囲に入っていきます。子どもの体の成長や心の発達に、いかに情動環境、エモーションナルな環境が重要かということがよくおわかりになると思います。

●子どもの発達には良い情報が必要

「おぎゃあ」という産声は、お産に驚き、母子分離で不安を感じている悲鳴です。ですから、赤ちゃんの脳の中には不安や恐れのようなものを感じる心のプログラムが、すでにあると言えるわけです。また、産声とともにプログラムにスイッチが入って、呼吸運動が始まります。―― 図2

産声がおさまると赤ちゃんは首をゆつくり回して周囲を見始めます。新生児覚醒状態と呼ばれます。そして、ファンツによる有名な実験により、新生児でも乳児でも物をじっと見詰める時間は情報量が多ければ多いほど長いということが報告されております。つまり、赤ちゃんはインフォ

メーションシーカー、「情報を求める存在」として生まれます。情報量が多ければ多いほど長く見詰めるということは、赤ちゃんが何か好奇心のプログラムのようなものを生得的にもっていると言えます。

子どもの体の成長には母乳やミルク、さらに離乳食、そして、だんだん大人の食品に変わっていくわけですが、そういった良い栄養が必要です。同時に、子どもの心の発達には良い情報も必要です。そして、それは育児や保育や教育で与えられるものなのです。特に、子どもを生かす喜びいっぱいにする情報は大切です。

●脳の要となる本能・情動脳

子どもは心と体の基本的なプログラムをもって生まれます。それは脳にある基本的な神経細胞のネットワークのプログラムであって、それにスイッチを入れることによっていろいろな行動が現れます。体が成長するにつれ、そのプログラムは、ほかのいろいろなプログラムと組み合わせられて、子どもが複雑な行動をとる

ように、大脳の高度な精神心理機能のコントロール下に入っていきます。特に前頭葉にある知性や理性の心のプログラムによりコントロールされることが重要になります。

脳は手際よく生きていくために、生存・運動脳、本能・情動脳、知性・理性脳というように進化していったと考えられるわけです。生存・運動脳は生きるためだけの体のプロゲ



図2

ラムの脳であって、本能・情動脳は生存・運動脳の働きをよくするための本能と情動の心のプログラムをもった脳です。これは原始的な哺乳動物の脳であり、さらに高等哺乳動物になって、知性や理性の心のプログラムをもった知性・理性脳に進化したと考えられます。人間の脳はその知性・理性脳の最も進化したものであって、文化、文明をつくる能力までもったと言えると思います。

私が情感や情動を大切にすべきだと考えるのは、生存・運動脳の働きをよくするために、そのような脳が進化してきたと考えられるからです。また、この脳がなければ知性・理性脳も生まれなかったということ、知性や理性の働きにも関係していることも忘れてはなりません。

●脳を動かす理性と感性の情報

脳のプログラムにスイッチを入れるのは情報ですが、その情報を私は理性の情報と感性の情報に分けて考えた方がいいと思っております。理性の情報はコンピュータで処理できるような情報で、同時に理性や知性の心のプログラムを動かせる情報であります。感性の情報はコンピュータで処理できないような、本能や情動に関係する心のプログラムを動かせる情報です。

重要なことは、人間は普通この理性と感性の情報を組み合わせてコミュニケーションをしているということです。代表的なのは、お母さんが赤ちゃんに「ママですよ。いい子ね」というふうに語りかけることであって、そこには言語化された理性の情報がりますが、お母さんらしいリズムやピッチなどもあり、それが感性の情報であると考

ればいいわけです。

感性の情報に反応する情動の方も進化の過程で大きく変化したと考えられます。原始的なものは快、不快です。快の方は、集団生活を維持するための、また家庭を維持するための心理機序として非常に重要な役割を果たしつつ、私たちが持っている喜びや笑いや愛といったものに進化したと思われます。不快の方は、生存競争に勝つための心理機序として怒りや驚き、あるいは泣くということもある意味では関係しているかもしれませんが、そういう情動に進化したと考えられます。それを私たち人間は理性や知性の心のプログラムでコントロールして、現在のような豊かな文化生活をしているわけです。

「*Joi de Vivre*」はフランス語ですが、「生きる喜びいっぱい」でポジティブなエモーションの発現であると言えます。大脳辺縁系の機能すなわち本能・情動脳の機能を発現する一つの形だと言えます。子どもたちの遊ぶ喜びいっぱい、学ぶ喜びいっぱい、あるいはお母さんにだっこされているときにあらわれるあの感じがフランス語では「*Joi de Vivre*」、日本語では「生きる喜びいっぱい」ということになります。子どもにとって、特に赤ちゃん、乳児や幼児にとって重要なのはこの「*Joi de Vivre*」であり、そういう機会をつくる必要があると思います。生存・運動脳にある体のプログラムばかりでなく、知性や理性の心のプログラムも活性化するからです。したがって、教育のあり方、育児のあり方、保育のあり方も、このような考え方によってデザインをする必要があると私は考えています。

子どもの「遊び力」が危ない

多田千尋

Tada Chihito
芸術教育研究所長

◎おもちゃはコミュニケーションを豊かにする道具

今回私は、自分が館長を務める「東京おもちゃ美術館」から、多くのおもちゃを運んできました。世界各国の多様なおもちゃをお見せしながら皆さんとお話をしようと思います。

これは、ドイツが世界に誇る木製玩具メーカーである「ケラー社」が作っているおもちゃです。ケラー社はほかにも多くの優れたおもちゃを作っているのですが、その中で一番小さなシンプルなおもちゃが代表作となっています。—— 図④

メーカーの社長がその理由を「この木の車はお母さんの背中を道路にして遊ばせるために作った」と語っていました。おもちゃデザイナーは人間の体が道路になっても気持ち良いようにデザインをきめ細かく工夫しています。

このように、スキンシップ豊かに親子で遊んでもらいたいといった思いが、メーカーマインドとしてあった訳です。ただ、大切なのは、これは気持ちが良いか、良くないかということは、さしたる問題ではなく、こういう遊び方は必ず会話を生み出すということです。このような遊び方で、母親が15分間も黙っていることはまずありません。子どもも親の背中を道路にしてずっと黙って作業に徹するかのよう遊ぶことは考えられません。親子の遊び方一つで、必ず会話が生まれ、「コミュニケーション玩具」に進化するので

す。
もう一つ違うおもちゃの例を出す



図④

とわかりやすいかもしれません。日本ではジグソーパズルというのは、一人で完成させる喜びを味わうためにやる方が多いのではないのでしょうか。ですから、日本ではジグソーパズルで遊ぶと会話が生まれません。

ところが、アメリカでは、ジグソーパズルは「ファミリーゲーム」だということです。家族全員でジグソーパズルを楽しみ、夕食後の家族団らんを楽しみます。家族全員でジグソーパズルをやると必ず会話が生まれますから、コミュニケーションの促進剤となります。

要するに、おもちゃというのはどういう遊び方をするかによって、まったく会話が起これない場合もあれば、活発に会話が起こる場合もあります。その会話、コミュニケーションを、私はとても大切にしています。私はおもちゃのことを、コミュニケーションを豊かにする「生活道具」と位置づけています。

◆おもちゃと指の運動、手の運動、脳の発達

これはロシアのおもちゃです。このおもちゃを初めてモスクワで見たときに、子どもたちの行列がすごくて驚きました。遊び方は、どちらが早く巻き取れるかの競争です。—— 図4

私は世界各国へ行っておもちゃをたくさん見ましたが、これほど両手を瞬間的に疲れさせるものは初めてでした。ロシアみたいな寒い国は家の中で運動を促すおもちゃがとても発達します。多分、同じ中国でも北と南では全然おもちゃや遊びが違うのではないのでしょうか。や



図4

はりその国の気候、風土というのはおもちゃにもかなり大きな影響を与えます。

このおもちゃを見たときに、子どもたちがほんとに夢中になって何回も何回もチャレンジしていました。

それで、見ていますと、4歳児は5歳児に勝てない、5歳児は6歳児に勝てないのです。幼児の段階の1年の差というのはやはり大きいです。そうやっておもちゃを通して子どもの成長、発達を教師がつぶさに観察をするということも、とても大切な仕事だと私は思っています。

子どもたちの指の動きや手の動きがいろんな遊びを通じてしなやかになっていくのは、とても大切だと思います。指の活動、手の活動というのは、しつけによってではなくて、多くの遊びによってしなやかになるのです。

ところが、このように子どもたちの手をサボらせない、子どもたちの手を活発にさせるおもちゃは、最近子どもたちの周りから姿を消していつています。今、日本の子どもたちが一番指を動かしているおもちゃというのは、ピコピコピコピコ、ボタンを押すものばかりが多いですね。中国の多くの子どもたちもボタンを押すだけの、それで長時間、画面を眺めているようなおもちゃが随分多くなっているのではないのでしょうか。

子どもたちの手というのはもうすぐれた機能を持った、「ハイテク」機器などかなわないぐらいのすぐれた道具でありながら、宝の持ちぐされになっているような気がします。

例えば、最近ソニーやホンダがロボットを積極的に作っています。でも、私は歩けるロボットや踊りを踊れるロボットしか見たことがありません。コマを回せるロボットだとか、あや取りができるロボット、折り紙ができるロボットなどというのは見たことがないですね。多分、皆さんがとても得意な中国の伝統手芸「剪纸」（切り紙）ができるロボットなんかはまだ地球上にはないと思います。

でも、皆さんの目の前にいる4歳、5歳、6歳の子どもたちは「剪纸」もできれば折り紙やあや取りもできるわけです。

ですから、そう考えると子どもたちの手というのはすばらしい「ハイテク」機器です。ところが、今の子どもたちは自分たちのハイテク機器は使わずに、目の前にあるハイテク機器だけを使っているのではないのでしょうか。

例えば、私が子どもどきのときにコマがとてもはやっていました。

〈多田先生が実演され、見事なコマ回しで、会場から一斉に盛大な拍手を受ける〉。

私、子どもどきのときに手のひらでコマを回して拍手を受けたことは一回もありませんでした。なぜかというところ、当たり前だったからです。誰でもできたのです。要するに、私が子どもどきのころは手と指を巧みに使いこなすような遊びがたくさん溢れていました。多分、皆さんが子どもどきのときにもそれはたくさん溢れていたと思います。

ところが、その巧みな指の運動、巧みな指の活動が、



今の子どもたちからどんだん姿を消していて、今の子どもたちはとても手のひらが栄養失調になっているような気がします。これはとてももったいないことだと思います。

◆おもちゃは子どもとお年寄りの架け橋

最後ですが、私の現在の関心事は、子どもとお年寄りの統合ケアです。日本と中国はどちらも少子高齢社会ですね。お年寄りの知恵とわざを使わなければ損です。大分前にアメリカの研究者と対談をしたことがありますが、その研究者は「お年寄りが町で1人亡くなることは町の図書館が1つなくなることに同じだ」と言っていました。そして、「その町の図書館であるお年寄りには、子どもたちに対して開架閲覧室でなければいけない」ということを言っていました。

そういうことを考えますと、この中国大陸にはたくさん図書館があります。いろんな知恵とわざがこの図書館の中にたんまりとたまっていると思います。たくさん昔話を知っています。たくさんさんの遊びも知っています。こういうものをお年寄りの体の中に眠らせておくのではなくて、子どもたちに活用していきたいですね。子どもとお年寄りをつなぐかけ橋としておもちゃはとても有効活用できるのではないかと思っています。

子育て・子育てエンパワメント

安梅勅江

Anme Tokie
筑波大学大学院教授

● 一緒に力を発揮すること

私は筑波大学で幼児教育、学校教育、障害児教育のプロを養成しています。今日は普通だったら4年間で教えることをたったの1時間にまとめてお話しします（笑）。

今日のキーワードは3つ。「エンパワメント」「根拠に基づく保育」、そして「保育のプロ」です。「エンパワメント」というのは、潜在的な能力を最大限に活用すること。簡単にいうと、「持っている力を引き出す」「元気になる」「みんなで元気になる」ということです。この「みんなで元気になる」は重要なポイントです。

エンパワメントするのに、最も大切なのは「楽しむ」ことです。プロとして皆さん自身が楽しむ。そうしないと、子どもたちは楽しめません。子どもたちが楽しめないと、子どもたちはエンパワメントしま

せん。

学問的に言いますと、「エンパワメント」という言葉を最初に保健、医療、福祉の分野に取り入れたのはソロモンという人で、参加すること、そして一緒に関与すること、相互関係ということを重視しています。幼児教育、学校教育、障害児教育に携わるプロにとって大切なのは、「教育してあげる」ということではなく、「一緒に力を発揮する」ということなのです。

エンパワメントというのは、本人、子ども自身が自分のことをきちんとできるように力をつけていくことです。そして、それができるように環境を整えたり、うまく応援することが私たち、プロの役割になります。

子どもたちは、すごい力をたくさんもっていますよね。例えば、遊ぶ力。それから、驚く力。子どもたちは驚くから、どんどん潜在的な

力が発揮できるのです。それから、おもしろそうだなあと、好奇心を抱く力。創造する力。子どもたちは創造の天才です。そして心地よくする力。赤ちゃんが眠っているだけで、大人はとっても気持ちよくなり、幸せな気持ちになります。そういう、すごい力が子どもにはあります。

こういう「子ども力」は、実は子どもたちだけにあるわけではないのですね。実は大人ももっています。そして、とても必要な力なのです。皆さん、保育のプロが、この「子ども力」をたくさんもつことで、子どもたちの「子ども力」も育てることができるのです。

● 調査に基づく科学的な根拠

私たちは日本で10年間、毎年3000人の子どもの追跡調査して、科学的な根拠を出しています。そして何が子ども力を発揮するのに影響するのかを、3万人分のデータを使って明らかにしました。エンパワメントの科学的根拠として、これからそのことについてお話しします。

日本では長時間保育が一般的になっています。長時間、保育園に預けると子どもに悪い影響があるのではないかと、たくさんのお母さんたちが心配しています。私たちは、科学的な根拠をもって、その心配は必要ありませんとお話してできるようになりました。きちんと質の高い保育園に預ければ、保育園を利用する時間の長さは関係ないことがわかりました。ですから、親御さんたちには、「質の高い保育園を選び、安心して一生懸命働いてください」とアドバイスしてあげてください。

しかし、その一方で、時間の長さにかかわらず、家庭でのかわり方は、大きく影響することもわかっています。ですから、「家に帰ったら、子どもと一生懸命、短い時間でもかかわってください」というアドバイスも必要です。例えば一緒に食事をとること。1日に1回でもいいのです。家族そろって食事しながら会話する。そういう機会を必ずつくるように勧めてください。それがないと、子どもの将来の発達に望ましくない影響がある可能性があります。

また、子どもと一緒に歌を歌うとか、お話をすることも影響しています。子どものためにしっかりと時間をとって、向き合ってみると、時間をつくりましょう。つまりポイントは、「子どものための時間」を、ちゃんとその子のために準備するということです。

また、おうちの中で親御さんだけかかわっているだけではダメです。外に出てさまざまな方たちとかかわる、さまざまな機会をもつことが大切です。公園に行ったり、動物園に行ったり、おじいちゃん、おばあちゃんのところに行ったり、お友だちのところに行ったりすると、子どもの言語発達とか対人技術の発達に望ましい効果があります。

制限とか罰は、できるだけ回避しましょう。「だめっ」と言わない。「早く」っていうことも言わない。「○○してはだめ」ではなくて、「大きくならなければならない」とか、「○○できてからしようね」というように、優しく語りかけてあげてください。大人でもそうですが、子どもも、意欲を大切に、「すごいね」とほめてあげて、叱らないようにする方が伸びます。

それから保護者への育児サポートも大切です。相談相手がいるとか、

自信がもてる状況があるかどうか。保護者自身がストレスをため込まないようにして、それを解決する手段を見つけられるようなサポートを、皆さんプロが提供してほしいと思います。

●エンパワメントのステップと種類

具体的には、エンパワメントの実践はどうしたらいいでしょうか。これには、ステップがあります。

まず、一番最初に大切なのが「コミュニケーション」です。子どもたちや保護者の方を受けとめる、そして理解するということですね。

2つ目のステップが「動機づけ」です。子どもたちや親御さんたちが喜んで参加する、意欲をかき立てられる状況をつくりみます。

3つ目が「科学的な根拠」です。皆さんがプロであるということは、親御さんや子どもたちにきちんとした根拠を提供できるということなのです。プロとして、きちつと論理立った、将来が予測できるような情報を提供することで、子どもたちも親御さんも安心してエンパワーされます。

さて、エンパワメントには3つの種類があります。「自分力エンパワメント（セルフ・エンパワメント）」「仲間力エンパワメント（ピア・エンパワメント）」「組織力・地域力エンパワメント（コミュニティ・エンパワメント）」です。

「自分力エンパワメント」は、自分で自分を元気にすることです。「仲間力エンパワメント」は、仲間同士で元気になることです。落ち込んだときに仲間と飲みに行くと元気になりますよね。「組織力・地域力

エンパワメント」は、組織とか地域を元気にすることです。幼稚園や保育園全体を元気にしたり、親御さんのグループを元気にしたり、ある地域全体を元気にしたりします。

幼児教育のプロには、この「自分力エンパワメント」「仲間力エンパワメント」「組織力・地域力エンパワメント」の技術をもってほしいのです。専門職の役割は、子どもたち、親御さんたちひとりひとりを元気にするのは当たり前のことですね。プラス、子どもたちの集団、親御さんたちの集団、地域まるごとを元気にする技術を身につける必要があります。

●プロとしての理念

絶対に忘れてほしくないことは、皆さんはプロとして社会の仕組みを変えていくという役割も担っているということです。なぜなら、皆さんは、子どもたちが何を求めているのか、何が必要なのが一番わかっているからです。皆さんこそが、社会の仕組みを変えていく力をもった方たちなのです。ぜひ子どもたちの代弁者になって、よりよい環境、よりよい社会をつくっていくパワーを発揮していただけたらと思います。これがプロの地域力・社会力エンパワメントの大切な役割のひとつです。

プロにとって大切な理念は、「当事者の最善の利益を守る」ということです。皆さんが、プロであって、アマチュアとは絶対に違うところは、この理念をもっているかどうかです。アマチュアは、もしかしたら裏切るかもしれない。でも、皆さんは絶対に裏切らないで、当事

者の最善の利益を守る。それがプロですね。子どもと保護者が幸せになるように、その最善の利益を守り続けるといふプロの意気込みを發揮してほしいです。

そしてプロにはもう一つ大切なことがあります。プロは「新しい価値」を生み出す。毎日同じことをやっていたらプロではないのです。昨日よりも今日の方が、もっと進んだことをするのがプロです。よく専門職は陥りやすいのですが、「去年の運動会もこんなふうによったから、今年もこうしましょう」というのはダメです。必ずプラスアル

図6

育児環境評価

(専門職による家庭訪問用)

該当するものに○、しないものに×をつけてください。

A 日常生活の中に多様性に富んだ人とのかわりの機会があること

- 1. 保護者は子どもが見える範囲にいるようにし時々子どもの方を見る
- *2. 保護者は仕事をしながら子どもに話しかける
- 3. 保護者は子どもの遊び時間を構成する

- 4. 保護者は訪問中少なくとも1回おもしろい遊びなどを子どもに示す
- *5. 保護者は毎日少なくとも1回歌を歌ってやる(ハミングでもよい)
- 6. 保護者は対談中、訪問以外のことを子どもに話しかける
- *7. 保護者は週3回以上子どもに本をみせてやる
- *8. 父親(的な役割の者)は週に3回以上子どもの世話をする
- *9. 子どもは父母(的な役割の者)と共に毎日1回以上食事する
- 10. きょうだい(的な役割の者)が子どもに話しかける機会がある
- 11. 保護者は意識的に発達を促すおもちゃを与える

B かわりが情緒的・言語的反応性に富んでいること

- 12. 保護者は子どもに新しい能力を発達させるおもちゃを与える
- 13. 保護者はより程度の高いおもちゃ類に関心を持つ
- 14. 子どもが保護者に向かい発声したら言葉かけなど(5秒以内)
- 15. 子どもがほえんだら言葉かけなど(5秒以内)
- 16. 子どもが目があったら言葉かけなど(5秒以内)
- 17. 子どもが接触してきたら言葉かけなど
- 18. 子どもが目があった時しかめ面しない
- 19. 子どもが体を動かした時言葉かけなど
- 20. 子どもの発声に対し無視することが1度もない
- 21. 保護者が会話中子どもが発声したら黙る
- 22. 子どもの行動を言葉で表現する
- 23. 訪問中少なくとも2回保護者の表情が変化する
- 24. 訪問中少なくとも1回保護者は笑う
- 25. 訪問中少なくとも2回子どもに自然な話しかけ
- 26. 子どもに物や人の名前を言ったり教えたりする
- 27. 訪問中少なくとも1回子どもを抱く

ファ、よりよいことをする。新しい価値を生み出すことを心がけてほしいと思います。

最後にまとめさせていただくと、保育と幼児教育のプロにとって必要とされるのは、「哲学——当事者の最善の利益を守る」、「科学——新しい価値をつねに追いかける」、そして「エンパワメント——みんなが元気になる」、その三位一体でプロとしての実践をするということです。皆さんの今後ますますのご活躍を期待しています。

- 28. 訪問中少なくとも2回子どもを自然にほめる
- 29. 訪問者が子どもをほめることに肯定的な感情を示す
- 30. 子どもに対し肯定的な感情を示す
- 31. 保護者の発音は明瞭で聞きやすい
- 32. 訪問者と言語的なやりとりをする
- 33. 会話に適切な長さの文章を使用

〈子どもがぐずった場合の対応〉

- 34. 訪問者との話をやめる
- 35. 子どもの位置を変える
- 36. 子どもに肯定的で同情的な言葉かけをする
- 37. 声をやわらかくトーンを高くする
- 38. だだめるしぐさをする
- 39. 子どもの関心を他に向ける(ゲーム、おもちゃ、顔など)
- 40. 子どもに対し否定的な発言をしない
- 41. 訪問者に対し否定的な言い訳をしない
- 42. 子どもを手荒く扱わない
- 43. 訪問中子どもをどならない制限や罰が回避されていること

- 44. 子どもに対する苛立ちや敵対心がない
- 45. 訪問中子どもをたたかない
- 46. 先週子どもをたたかなかつたと報告
- 47. 訪問中子どもをしかつたり非難したりしない
- 48. 訪問中子どもの行為に干渉や制限をしない
- 49. 子どもが自由に動くような状態にしておく
- 50. 訪問中子どもに探索活動を許す
- 51. 子どもは1冊以上の自分自身の本を持つ
- 52. 子どものテレビの視聴時間は1分以上5時間未満
- 53. 保護者是对話中子どもにおもちゃやおもしろい活動を与える
- 54. 筋運動をとまなうおもちゃ(ボールなど)がある
- 55. 押したり引いたりするおもちゃがある

- 56. 子ども用車など移動用のおもちゃがある
- 57. 家のおもちゃ、役割遊びのおもちゃがある
- 58. モビールやテーブル、高椅子などがある(空閒利用のおもちゃ)
- 59. 積み重ねることができるとおもちゃがある
- 60. 絵本やビデオなどがある
- 61. ラッパやたいこなど楽器がある
- 62. 保護者は子どもに水や粘土遊びをさせている
- 63. 子どもの外出機会がありさまざまな外部社会に触れること
- 64. 週1回以上買物に子どもを連れて出かける
- 65. 週4回以上散歩や公園などに子どもを連れて出かける
- 66. 保護者との行き来が月1回以上ある
- 67. 家族以外の者(子ども含)との行き来が週1回以上ある
- 68. 家族以外の者(子ども含)と週1回以上関わる機会がある
- 69. 家族ぐるみでつき合っている家族がある
- 70. 子どもの発達をチェックするため定期的に保健センターなどに連れて行く

- 71. 子どもが安全な姿勢をとるようになる
- 72. 10冊以上の本が見えるところにある
- 73. おもちゃをしまつ特別な場所がある
- 74. ペットがいる
- 75. 家の中に植物がある
- 76. 家の回りは静かである
- 77. 家の中は整頓されている
- 78. 屋外の環境は安全である
- 79. 屋内の環境は安全である
- 80. 子どもの発達を配慮した安全な物理的な環境が整備されていること

※……報告による記入可能

- 79. 保護者外出時、子どもの世話をする人が決まっている
 - 80. 養育者が2人以上いる場合の相互連絡をとっている
- ※出典…子育て環境と子育て支援(安梅勸江、勸草書房)。なお、本資料をご使用になるときは、必ず、出典を明記してください。

子どもの社会性の発達とその障害

榊原洋一

Sakahara Yoichi

お茶の水女子大学教授

◎ ADHDの子どもの特徴

今日は、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー症候群についてお話をしたいと思います。

ADHDは、ここに書いてあるように、英語の attention, deficit, hyperactivity, disorder のそれぞれの頭文字をとっています。

日本では1994年にこの診断基準がはっきりと定まって以来、よく知られるようになりました。多分、中国では状況が違っていると思いますが、日本ではそういうお子さんに、あるお薬を使うと非常に効果があることがわかって、特に医者の間では非常に注目されるようになってきます。

ADHDの診断基準としては、9つ出ていますが、全部で18のいろいろな行動の特徴が書かれています。診断をするためには、9つのう

ち6つ以上の項目を満たす必要があります。注意欠陥の症状としては、集中ができない、あるいはいろいろな指示を受けても、それがうまくできない、あるいは順番を追って物事を行うことが非常に不得手であるというような特徴があります。

注意欠陥のほかには、多動と衝動性の症状があります。その中で一番目立つのは、座っていても、もじもじ動き回ってしまったり、それから、小学校の低学年ぐらいに多いんですが、机に座っていられないで、すぐに気が散って歩き出したり、部屋から出ていってしまったり、このような行動も特徴です。そして、何か指示を与えたときにも、最後まで聞かずにすぐに行動してしまったり、順番を待つことができない。この9つのうち6つ以上満たすと、多動衝動型のADHDということになります。

ただ、大事なことは、年齢が小さいときは、みんな落ち着きがない

んですね。その年齢の標準に比べてそういう症状がすぐ目立つ場合に診断をします。6か月以上、2か所以上の場所が続いて、日常生活にいろいろな問題が起きた場合に、こういう診断をつけることにしています。

このような人がどのくらいいるか、いろいろな国で調査されています。中国でも1985年に行われていまして、これは全国で行われた調査ではないと思いますが、6%の子どもがそれに当たるといっています。日本は3%ですが、決して日本の方が落ち着いているということではなくて、調査の仕方によって少し差が出るということであって、ほとんど同じだと思います。

そして、男である私としてはつらいんですが、この障害は男に圧倒的に多い。5倍ぐらいの比率です。思春期を越えると、少し落ち着きが出てきますが、アメリカで大きな調査をしたら、大人でも4%に注意欠陥の症状が、あることがわかっています。なぜそうなるかということをお話します。

● ADHDとワーキングメモリー

こういう、いろいろな行動の特徴がある人を見ると、きつと育て方が悪いんだ、あるいは本人が怠けている、そのように考えがちです。ところが、1人のお子さんがADHDだと、その兄弟は25%から35%、そしてお父さん、お母さんもかなり高い率でADHDであることがわかっています。つまり遺伝性があるのです。

行為障害は、調査によって少し幅がありますが、平均をとると、

30%ぐらいです。3人に1人の子どもが非行、行為障害になってしまふことがわかっています。それから、ADHDは、それだけで単独であるのではなくて、いろんなものと合併することがわかっています。

学前教育にとっては重要なことですが、事故を起こしてけがをしやすいこともよくわかっています。私の外来にこういうお子さんが来ますが、まず、お話をしながら子どもへのひざ小僧を見ます。転んだり、引っかけたり、切ったりした傷がたくさんある子が多い。

ADHDの子どもは、脳の前方、前頭葉の働きがちよつと十分にきかないことがわかっています。前頭葉には、ワーキングメモリー、作業記憶という、短い記憶をためておく場所があります。ADHDの子どもは、その部分の働きが少し不十分です。

作業記憶、ワーキングメモリーが切れる経験は、皆さん、だれでも知っています。仕事をしていて隣の部屋へ何か物を取りに行ったと思つて、ドアをあけて入った途端に何をしに行ったか忘れてしまふ。それが作業記憶が切れた状態です。ADHDの子どもは、それがいつも、ぶつぶつ切れちゃうような状況だと考えればいいかと思えます。ですから、ADHDの子どもに、まずこの仕事をして、次にこれをしなさいと言つても、一つ終わると、ぶつと切れて、もう何をしていいかわからない。その証拠に前頭部でのブドウ糖の使われ方が少ないという脳科学の結果も出ています。

こういう子どもたちに、実は、メチルフェニデート、商品名リタリンという薬が効くことがわかっています。国によっては使われていないところもあり、中国の状況はわかりませんが、この薬を飲むことで、

このような症状を非常によく抑えられることがわかっています。その薬を飲むと非常に効果が出てきて、9割以上の子どもで症状がなくなるということで、日本ではADHDの症状が重い子どもには薬を処方することが普通になっています。

しかし、それ以上に重要なのは、家とか幼稚園、保育園で子どもたちにどのような教育、どのような保育を行うか、そのやり方です。こういう子どもたちのために、よりよい教材、教え方などが大変工夫されています。

●自閉症の子どもの特徴

次に、自閉性障害——その中でも高機能自閉症、アスペルガー症候群についてお話をいたします。

診断基準の中では、広汎性発達障害という大きなグループがありまして、その中に自閉症とアスペルガー症候群が入っています。自閉症は、1943年にアメリカのカナーという人が11人の子どもで報告したのが初めてです。

言葉が遅れることがまず第一の特徴です。3歳ぐらいになれば、どんな子どもでも少なくとも片言の言葉をしゃべることができるのが普通です。しかし、自閉症の子どもは言葉がなかなか出てきません。

2番目の対人的相互作用の障害は、自閉症の中で一番大きな症状です。私たちは、言葉を使わなくても相手の人の顔を見れば、怒っているのか、笑っているのか、泣いているのか、そういうことがすぐにわかります。ところが、自閉症の子どもはそういうことがわからないの

です。

3番目の特徴としては、物にこだわって、おもちゃの一部だけに関心をもったり、非常に変わったものに興味をもつ傾向があります。これも大体、男の子に多くて、女の子の4倍ぐらいの子どもが男の子です。

それから、全員には見られませんが、大きな音がしたりすると耳を押さえて逃げてしまう、あるいは、いつも着る洋服が一緒でないと気持ちが悪といった触覚過敏という症状もよく見られます。

8割以上の子どもに精神遅滞、知的な遅れがあります。逆の言い方をすると、2割の子どもには知的な遅れはないわけです。言葉は遅れますが、だんだん出てきます。それから、15%の子どもにてんかん発作があり、脳波を調べると異常があります。

●アスペルガーの子どもの特徴

アスペルガー症候群の話をこれからしますが、自閉症の子どもは、全然言葉を使わなかったり、少ししかしゃべらない。高機能自閉症になると普通のお話ができる。アスペルガー症候群になると、むしろ言葉は流暢に非常に出るといことが言われております。

アスペルガー症候群の診断基準が書いてありますが、これは自閉症と同じです。対人的な相互関係がうまくできない。そして、何か一つのものにこだわる、非常に一つのことばかりやってしまう。そういう趣味の偏りももう一つの特徴です。

知的に高くて非常にこだわりが強い子どもは、むしろ小さいときに

は天才児と間違われることがあります。3歳でも、例えば漢字をたくさん覚えてしまうと、カレンダーサバンといって、10年ぐらい先の何月何日と言うと、その曜日がわかってしまうとか、そういう子どもが、こういうお子さんの中にはいます。しかし、そういう能力はあっても、人とかかわっていく、人とうまくやっていく能力が非常に低いというのがアスペルガー症候群です。

アスペルガー症候群の子どもはどんなことで大変かというと、例えば、周りの人の表情とか視線がわかりませんから、怖い顔をして、アスペルガー症候群の子どもはそのことが理解できません。

そして、人のいろいろな動作などの理解も非常に下手です。人との距離をとることが私たちの社会生活にとっては重要ですが、それができません。

そして言葉で言うと、比喩が非常にわかりにくいという特徴があります。例えば日本の幼稚園では子どもが騒がしいときに、「静かにしなさい」と言うかわりに、このような言い方をします。「ここは、アリのさんの声でしゃべりましょう」と。これは大変頭を使うような指示です。なぜなら、だれもアリの声を聞いたことがないからです。でも、アリは小さいから声も小さいんだろうというのが比喩、類推です。そういうことがアスペルガー症候群の人はできません。

皆さんは学前教育に関係のある教育者ですから、嘘はついてはいけないというように教えています。でも、皆さんは毎日、嘘をついていらっしゃると思います。お世辞です。ですから、園長先生に「この間、上海に行って買ってきたこの洋服、いいでしょ」と聞かれたら、似合わない

くても「お似合いです」と言うのが正しい言い方です。そのようなこともアスペルガー症候群の人は下手です。

ほかにも幾つかありますが、こういう特徴があるために、お話しできて、知的にも普通であるにもかかわらず、社会の中でうまくやっていくことができないのが、アスペルガー症候群の子どもたちや大人です。

アスペルガー症候群とADHDの両方が一人の人にあることもよく知られています。日本の文部科学省の調査でも、0.2%の子どもが自閉的な症状と多動の症状、そして学習障害の3つをあわせもっていることがわかりました。そして、このような発達障害の子どもたちは6.3%、あるいはアメリカなどでは10%、10人に1人の子どもがそういう特徴を持っているわけです。ですから、学前教育をするためには、一つは、教育、心理だけではなくて、このような医学的な知識も一緒にもたなくてはいいけない。そういう時代になっております。